◎ 美術館情報

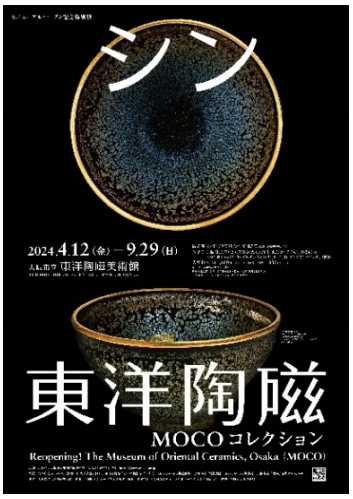
最新の情報は、各施設の公式ホームページなどでご確認ください。

1. 大阪市立東洋陶磁美術館 【大阪・北区】（https://www.moco.or.jp/exhibition/schedule/?e=596）

4 月 12 日（金）～9 月 29 日（日）

リニューアルオープン記念特別展「シン・東洋陶磁－MOCO コレクション」

リニューアルを記念した本展では、大阪市立東洋陶磁美術館(MOCO＝モコ)が世界に誇る「安宅コレクション」や「李秉昌コレクション」を中心に、当館所蔵の珠玉の東洋陶磁コレクションなど約 380 件を、装い新たにご覧いただきます。タイトルの「シン」には、「新」たなミュージアムへと歩み始めること、「真」の美しさとの出会い、「心」がワクワクする鑑賞体験を、という 3 つの願いを込めています。大阪市立東洋陶磁美術館の原点であり続ける珠玉のコレクションの新たな魅力と価値に出会える、「シン・東洋陶磁」をご体感ください。

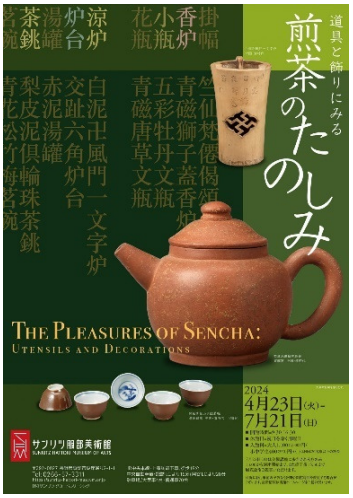


2. サンリツ服部美術館 【長野・諏訪】（https://sunritz-hattori-museum.or.jp/pages/237/）

4 月 23 日（火）～7 月 21 日（日）

企画展： 道具と飾りにみる煎茶のたのしみ

透き通った茶の色や味、広がる香りをたのしむ煎茶には、ともに育まれてきた文化があり、ただ茶を飲むことにとどまらないたのしみがあります。煎茶が大いに盛り上がりをみせたのは、幕末から明治中期にかけてです。複数の茶席を設けるだけでなく、美術品を鑑賞する展観席まである大規模な茶会が開かれるようになりました。こうした煎茶席などで愛好されたのが、中国で作られた道具である「唐物」です。開国により貿易や人の行き来が活発になり、中国から輸入される道具類が増えており、煎茶席に用いられる傾向が強まりました。本展では、幕末から明治中期の茶会に注目し、「倶輪珠茶銚」をはじめとした初公開の作品 14 点を含めた魅力あふれる煎茶道具をご紹介いたします。明・清時代の文人たちに憧れた人々によって育まれた煎茶の世界をおたのしみください。



3. アサヒグループ大山崎山荘美術館 【京都・乙訓郡】（https://www.asahigroup-oyamazaki.com/exhibition/chineseceramics/）

6 月 1 日（土）～9 月 1 日（日）

企画展： 愛知県陶磁美術館コレクション　中国やきもの 7000 年の旅　大山崎山荘でめぐる陶磁器ヒストリー

愛知県陶磁美術館のコレクション約 80 点により、中国新石器時代から清朝にいたるまで 7000 年に及ぶ悠久の中国陶磁の歴史を概観します。神秘的な土器の世界、副葬品として用いられた多彩色の器や日常の世界を再現する建築明器（けんちくめいき）、世界に影響を与えた（あたえた）青花（せいか）や、五彩（ごさい）をはじめとする数多くの技法などを、中国各地の窯の代表作品を通じて紹介します。「シルクロードを行き交う砂漠の舟」「蓋のつまみにゆるキャラ獅子」といった、各作品の特徴を捉えたユニークなキャッチフレーズが、作品鑑賞をより一層楽しく演出します。

約 100 年前に建てられた大山崎山荘の建築、室内の中国古代の意匠と、絢爛（けんらん）たる中国陶磁の共演も見どころです。

4. 多治見美濃焼ミュージアム 【岐阜・多治見】

4 月 27 日(土)～9 月 1 日(日)

令和 6 年度多治見美濃ミュージアム企画展 「中国陶磁 ～よみがえる山本コレクション ー陶磁器編ー」

昨年に続き、平成 12 年(2000 年)に山本正之氏から寄贈いただいた中国陶磁を、約 20 年ぶりに展示します。417 点におよぶ作品の中から厳選し、昨年は「陶器編」として、新石器時代の彩陶や漢代の緑釉陶器、唐代の三彩や墳墓の副葬品を中心に紹介しました。今回の「磁器編」では、宋代以降作品を展示します。近代主流となり、世界に大きな影響を与えた景徳鎮窯の作品の中から、古くから日本人に好まれた古染付をはじめとし、前半では宋・元代の青磁、白磁、黒釉やその産地の作品を、後半では明・清代の鮮やかな色釉や五彩等の作品を紹介します。

※前期、後期の二部に分けて展示入替をします。
(7/2(火)は展示替えのため M1 展示室を閉鎖します)

全期間: 古染付(景徳鎮窯、その他)、中国陶磁史
前期: 4 月 27 日(土)～～6 月 30 日(日)
宋・元時代の青磁中心に各地のやきもの
後期: 7 月 3 日(水)～9 月 1 日(日)
明・清時代の発展

5. 多治見美濃焼ミュージアム 【岐阜・多治見】

令和 5 年 3 月 12 日(火)～令和 6 年 7 月 7 日(日)

企画展: 「明治・西浦焼の世界」

本展覧会は国内では作品がほとんど残されておらず、幻のやきものとなった西浦焼を多治見市内で継続的に観覧できるよう企画しました。明治時代、西浦焼は一つのブランドとして多くは欧米向けの輸出品として販売されました。「西浦焼」とは土岐郡多治見町(現多治見市)を中心に、明治初期より三代から五代西浦圓治のもとで製作されたやきもののことをいいます。今回西浦焼とあわせてご紹介するアメリカのルックウッドポタリー社は明治 13(1880)年にアメリカ・オハイオ州シンシナティ市で設立され、美術陶器を製作していた製陶所です。19 世紀後半のアメリカでは、南北戦争後の経済発展を背景に各地で都市文化が栄えます。市場がアメリカで拡大するなか、万国博覧会を契機としてジャポニスムと呼ばれる日本趣味が欧米で流行しました。そのため、アメリカ国内でもヨーロッパや東洋にみるような芸術的な陶磁器を製作するようになります。

ルックウッド製陶所の創始者 M.L.ニコルズ夫人は明治 9(1876)年にフィラデルフィア万国博覧会の会場において、日本の精緻なやきものを見たことをきっかけに設立を決意しました。日本の自然主義的なモチーフおよび文様は、ニコルズ夫人に新鮮な驚きと感銘を与えたのです。こうして誕生したルックウッド製陶所は、設立からわずか数年で万国博覧会において金賞を獲得し、世界から注目をあびる名窯となります。明治 20(1887)年からは金沢出身の白山谷喜太郎が雇われ、ルックウッドを代表する絵師として活躍しています。本展では明治時代に作られた西浦焼・釉下彩の作品を中心に、同時代に流行をリードしていたアメリカのルックウッド製陶所との関わりにも触れ、日本とアメリカの相互的な影響を探ります。